

平成24年8月5日発行(毎月5日1回発行)
第52巻8月号(通巻627号)

風土



金魚玉
神蔵器

てのひらに豆腐をおろす傘雨の忌

苺食ぶ次の苺に眼のとんで

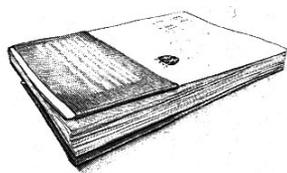
四の坂は竹の皮脱ぐ晴間かな

虹立つや芙美子のラッキーストライク

芙美子には晩年のなし沙羅の咲く

金魚玉吊ればいづれも真正面
くちなしや午前一時の匂ひたつ
さくらんぼ摘む月山を引き寄せて
兄の忌や兄の手植ゑし合歡の咲く
耳遠くなる七月のとつぱづれ
いくたびも目覚めて涼し滑川
立ちて洗ふわが一身も夏旺ん

悼今井杏太郎氏



竹間集

同人作品



青嵐 塩田博久

老鶯や箒目しるき東慶寺
嘯りの替りて径は山に入る
一椿樹より一山の落椿
禅寺に座布団干され蝶の昼
山号の一点重し青嵐
柏槇の力溢れて青嵐
風薫る中や花塚茶怨塚

一八 代田青鳥

一合の米磨ぐ生活著莪の花
風五月セザンヌ展の列弛ぶ
娘と歩く卯の花月の堤かな
市庁舎のどんどん伸びて麦の秋
夏めくや杖を頼りの医者通ひ
あつさりと紐の解けて五月尽
一八や水を湛へて釣瓶井戸

篠の子 田中佐知子

葉桜の風こまやかに五月来る
キャンバスにポピーの風を描くなり
捨田幾枚野太き声の昼蛙
花桐や家々は蔵構へゐて
なんぢやもんぢやの花の盛りの工学部
竹皮を脱ぐ若州一滴文庫かな
朝露の篠の子一滴文庫かな

羽の国に

工藤ミネ子

山毛櫟芽吹くチエンソーアート小熊生る
曲るたび小田となりゆくきぶしかな
蟻のみち櫟大樹をのぼりゆく
走る水田掻きの水と相別れ
鳥海山の雪の羽衣五月来る
美しき齒の乙女等よ更衣
羽の国に遇ふ一輪の袖隠

訪問着

柴田久子

兄弟に男はあらず柏餅
薫風やラジオ体操第二まで
更衣へて少女の手脚長かりし
石の上にのりて蜥蜴の王者めく
白鷺の置きてゆきたる水糸くぼ
夜叉像の御丈五寸開帳寺
牡丹や思ひ出したる訪問着

一列に行く

中村洋子

居士林に風の出入り五月来る
牡丹の開ききつたる静寂かな
雲水の一行に行く素足かな
漱石の句碑に差し掛く白日傘
新樹光やぐらの奥に五輪塔
合掌す牡丹五百の建長寺
歳時記の厚き頁の夏来たる

桐の花

橋添やよひ

一の鳥居くぐりて馬場や桐の花
公卿風武家風射手や風薫る
一の的二の三の的青嵐
田水張つて空のひろがる近江かな
鉛筆の丈の不揃ひこどもの日
深山蓮華絹織物の神祀り
夜の躑躅聚洛に利休屋敷跡

淡々

南うみを

飛魚とんで蒼まさりける丹後かな
ト口箱の小鰯かならずこぼれけり
離れ鵜に午後の港の広すぎる
葎切にじやがいもの葉のてらてらと
猿鳴くとじやがいもの花摘みにけり
日食に躍り出たる蜥蜴の尾
玉葱に夕日の微熱ありにけり
子燕に遠まなざしの夕べあり
滝風のそのまま若葉風となり
新茶汲み淡交といふよきことば

山河集

同人作品



神蔵
器選

代々の禪寺生まれ雀の子
かけ込みの人なき寺や著莪の花
隠岐の海歓迎のごと飛魚飛びて
苗札立て育つ喜びいただけり
復活祭ローマ人への手紙かな

安永 圭子

その中に乱世の炎牡丹咲く
どの道を行くも仏に古都薄暑
熨斗袋包む袱紗や鉄線花
万緑にくひ入る百八やぐらかな
若葉濃し日のあるうちの湯浴みかな

鈴木 庸子

夏場所や夫の家系に追手風
索道の人の危ふさ栃の花

江戸時代の大関

天野みゆき

桜桃忌何事もなく暮れにけり
梨の花村の十戸に貧富あり
つぶやきも書けば句となる花茨

高村 令子

朝焼やどの田水にも音溢れ
葉桜の中へ奥へと郵便車
求めたる一書小脇に風光る
歩まねば大夕焼へ残さるる
菖蒲湯の嬰受く丸ごと命かな
水切りの三つ跳びたる立夏かな
燕の子はや漆黒の艶をもち
噴水の思ひつめたる高さかな
息荒き犬に出会へり滝の道
いちまいの行着干しある花うつぎ

浅田 光代

◇特別作品◇(抄)

五月の天城

小松 昭子

新緑の色を違へて山の巒
しろばんばの里や植田の風渡り
天城嶺や湧いては消ゆる夏の雲
立ち寄りし靖旧居や青葉風
石楠花や開け放されし靖邸
杉落葉国土峠の九十九折り
麦秋や穀白たたく水車小屋
夏つばめ赤きポストの道の駅
水音の豊か天城の櫛若葉
天城路を歩きし夜の髪洗ふ

風土独語／神蔵器



代々の禅寺生まれ雀の子 安永 圭子

「風土」恒例の「竹の子句会」で特選になった句である。会場は建長寺内の応供堂であった。吟行地としては鎌倉駅から北鎌倉駅までの間、及びその周辺ということで、多くの参加者は日帰りの吟行で、出句は多く建長寺に集中した。

建長寺は、北条時頼が南宋から来朝した大覚禅師のために、建長五年（一二五三）開創した寺で、禅師を開山第一世とする。以来、盛衰はあったものの、続々中国から渡来する禅の高僧や、日本から中国に渡って得法した禅僧が相次いで住し、日本禅宗の法源となり、鎌倉五山の筆頭となった名刹である。

私は建長寺での句会は二度目であったが、今回、総門の前に立つた時、思い出したのは三十年も前に吟行した鶴見の総持寺の句会のことであった。この二つの寺は私にとって直接的には全く関係はなく、しかも禅宗と曹洞宗と宗派も異にしているが、深遠、幽邃、壮大にして荘厳なたたずまい、圧倒的な雰囲気は打たれたのは総持寺も建長寺も同じであった。

鶴見の総持寺の句会は、桂郎先生はご健在であられた。先生とは鶴見駅で落ち合って寺に向かったが、参道に入り総門の前に立った時、私は「えらいところに来てしまった」と、頭の中が

真っ白になってしまった。先生はと見ると、先生はそのままゆくりと境内に入り僧坊の句会場に入られた。私もいったん句会場に入ったが直ぐ荷物を置いて庭にとび出した。約十五万坪といわれる境内は流石に広大であり、大祖堂・仏殿・香積台・紫雲台等の建物、特にまだ新しい大祖堂の三十七メートルにも及ぶ鉄筋コンクリート建である。私は寺の建物は早々にあきらめ、庭を出て裏の墓地を急いで廻り何とかメ切の時間に駆け込んだ。ほっとして先生はと見るとにこやかに談笑しておられた。「今日は先生は出句されないのだ」と思った。やがて、披露がはじまると、

春寒き大釣鐘を冠りたり 桂郎

鳥交む寄せてそむけて庭の松 〃

松の間のただつびろきに春暖爐 〃

雨風の春総持寺や奥知らず 〃

あと一句は忘れたが、先生は句会には確かに五句出句されていたのである。

掲出句は小さな雀の子にポイントが当たっている。それは七百年以上におよぶ代々の高僧、しかも禅宗の寺であることも故なしとしない。雀の子は、この世に生きるすべてのものの象徴、命の尊さと、生きるよろこび、やわらかな春の日差しと共に、仏の愛といつくしみがそこにある。（以下略）

風土集



神蔵器選

若葉 風金環蝕を零しけり 上尾 根岸 善行

肺機能検査の呼吸薄暑かな
癌病院出て振り返る薄暑かな
豌豆を挽ぐ傍に居るだけのこと

抜き足のまま白鷺の立ち止まる
竹皮を脱ぐや天園入口に

東京

柿沼 盟子

残んの香放ち崩るる牡丹かな
雪溪を滑りし風の来りけり

五本指の納の靴下夏立ちぬ
金雀枝の庭へまはりて上がりけり

老眼鏡外して初夏の風を吸ふ
母の日や亡母の日記はすぐ終はる

京都

杉本葉土子

笹そばに海老天載せて夏来る
薔薇真紅本日夫婦四十余年

アマリリス印象派はマチスが好き

手術室十一号に春尽くる 川崎 内藤 静

目覚むれば夏あたらしくして眩し
雲の峰波郷が耐へし痛みとも
麦秋の日には葉といふ言葉

水打つて飲食の世に戻りたる
短夜の電子書籍の「須磨」「明石」

東京

奥田 茶々

母の日や母の扇と謡本
突然の雷雨に崩れ組み体操

ひらひらと常照皇寺にぬもりの子
放水銃の一斉訓練五月来る

三粒づつ種蒔く厚き男の手
蔦若葉ト音記号のカフェの椅子

相模原

岡本 尚子

羊腸の関所間道花卯木
黒楽に盛る桜桃の固さかな

薄暑かな迷ふ男坂女坂